六月

外には雨が降りつづけている。部屋の内は笑い声で晴れわたっている。窓硝子はぬれて曇っているが、子どもたちの顔はみんな明るく輝いている。外からの光でなく、内からの光である。天の太陽は雲につつまれる日があっても、ここの小さい太陽たちは、いつだって好天気だ。

その子どもらに、またしても鬱陶しそうな顔をして見せるのはおとなだ。なぜこう降るのかと、いっても仕方ないかこちごとをいって、呟いて聞かせるのもおとなだ。――子どもは、知らなくてもいいことを、おとなから教えられることが屢々ある。六月の雨だって、おとなが教えなかったら、子どもには少しも苦にならないものであろう。

（倉橋惣三選集　第三巻　育ての心より）